

EU 避難民危機：不法な戦争をやめよ、犠牲者に罪を着せるな

【訳者注】避難民の問題は、アメリカとそのヨーロッパ同盟国の侵略戦争に、百パーセント責任があるのだから、この論文のように、はっきり繰り返してそれを言うべきである。すり替えるな、悪の根源から目をそらすな、と言わなければならない。最後のセンテンスが肝心である——「悪漢どもを暴き立てよ、犠牲者に罪を着せるな！もし我々が無法の暴政に向かって立ち上がらなければ、そのとき我々が次の犠牲者になる。」この論者は3人の英と仏の政治指導者を名指しで糾弾している。では彼らが誰からも咎められないのはなぜか？彼らの背後に誰がいるのか？それは、ここに名の上がっていないもう一人の、大量の子供殺しの責任者トニー・ブレアに、「セイブ・ザ・チルドレン」を通じて功労賞が与えられるという、転倒したこの世の構造から突き詰めていくよりほかない（2015/2/15、2015/3/4 掲載記事参照）。

By Finian Cunningham

January 28, 2016 (Information Clearing House, RT)



ヨーロッパは、避難民の流入によって引き起こされ、さらに悪化する、外国人嫌い与人種差別の危険な坂道をすべり落ちつつある。デンマークの新しい“没収法”は、毒気の風土の迫りくる兆候である。

しかしこの問題に対する本当の解答は、ワシントンの犯罪戦争を、なぜヨーロッパが支持するのかを追及することである。

換言すれば、ヨーロッパ市民たちが、問題の根源的原因に立ち向かうことであって、その症状に反応することではない。我々は悪者を衆目にさらすべきであって、犠牲者に罪を着せるべきではない。

我々は、国際法への明白な違反であるものに対して、法的制裁と政治指導者の訴追を要求すべきである。

ヨーロッパの諸政府は、戦争犯罪を問われているにもかかわらず、我々は、彼らの大量殺人をそのまま見逃している。そこで次に、我々の政府の起こした戦争や紛争からの避難民を排斥するというような、二次問題が起こったとき、我々は**非論理的にも、卑怯にも**、我々の政府犯罪の犠牲者たちに、罪をかぶせることに躍起になっているのだ！

悪者を衆目にさらすことの一つは、アメリカに導かれた NATO 軍事同盟のヨーロッパ・メンバーを、国際法の違反者として摘発することであろう。個々の政府と軍事指導者は、戦争犯罪と平和に対する罪を追及されるべきである。有罪とすべき証拠は歴然とそこにある。ヨーロッパ諸政府がいがわしい戦争を海外で行いながら、咎められることもないという事実が、この問題の真の恥の根源である。

元ユーゴスラビア、アフガニスタン、イラク、リビア、シリア、それにウクライナでの戦争、またパキスタン、ソマリア、イエメンでのドローンによる暗殺、更にはマリ、ニジェール、象牙海岸での密かな軍事作戦——これらはすべて、ヨーロッパ構成員国家の共犯を伴うものだった。特にイギリスとフランスは、米主導の NATO 軍事介入を、陰に陽に、リビアやシリアにおけるように、最もあからさまに実行してきた。

中央アジア、中東、それにアフリカ全域に追いやられた、何百万という人々は、ワシントンの軍国主義につながったヨーロッパ軍国主義の、直接の結果である。マリや中央アフリカ共和国へのフランスの介入でさえ、国際法の下では疑わしい。両国とも、国連安保理の決議なしに踏み込まれた。

過去5年間では、おそらくリビアが、NATO やそのヨーロッパ構成員によって行われた不法な戦争による、最も言語道断の破壊の例であろう。そこには英と仏のほか、ノルウェー、デンマーク、オランダ、イタリアが含まれていた。アメリカと共に、これらの国々は、国連の規定に違反して、アフリカで最も栄え安定していた国を、血まみれの瓦礫にしてしまった。何千という市民が、7か月間の米 - EU の攻撃作戦で殺され、それは指導者ムアンマー・カダフィのむごたらしい死で頂点を迎えた。

リビアは徹底的に略奪されて、国家の体をなさなくなり、不法武装した過激派グループによって荒し回されたが、この野蛮行為へのきっかけを作ったのはヨーロッパ諸政府である。いわゆる文明国、法治主義の、ノーベル賞を取るヨーロッパのどこに、これら残忍な犯罪の裁きを求める声があるだろうか？

にもかかわらず先週、アメリカとヨーロッパの軍事首脳が、リビアとシリアへの更なる軍事介入を要求した。この軍事介入宣言は、“テロとの戦い”を口にしてはいるが、それ自体が国際法の下での不法侵略行為である。これはすぐれた戦争犯罪法学者クリストファー・ブラックが直接、私に言ったことである——我々のヨーロッパ諸政府と米同盟による、この露骨な犯罪の積み重ねに対して、民衆の怒りや告訴の要求が、どこに見られたらだろうか？

http://www.nytimes.com/2016/01/23/world/africa/us-and-allies-said-to-plan-military-action-on-isis-in-libya.html?_r=0

エリトリア、スーダン、カメルーンのような、直接 NATO 軍に攻撃されていない国々からさえ避難民がやってくるが、それはたいてい、NATO の破壊によってリビアがそうなったように、無法化したヨーロッパへの通路ができたからである。

今週、デンマーク議会は、保護施設を求める人々のもっている 1400 ドル相当以上の資産を、警察が没収できる法措置を票決した。この動きは、デンマーク政府による人権侵害ではないかという国際的な論争を引き起こしている。

<http://www.independent.co.uk/news/world/europe/denmark-approves-controversial-refugee-bill-allowing-police-to-seize-asylum-seekers-cash-and-a6834581.html>

デンマークの法律は、避難民に対するヨーロッパの、ますます敵対的になっていく連続した不気味な行動の一つにすぎない。ハンガリー、スロベニア、ポーランド、オーストリアのような国々は、国境を閉ざしている。これまで、より開かれた国だったドイツやスウェーデンも、避難民の受け入れを制限し、多くの人たちを元きた場所へ戻そうとしている。

一方で、さまざまな国の住民たちが、大量の外国籍者の大波に不安を抱くのも理解できる——特に外国人が、皮膚の色も、衣服も、宗教的習慣も大きく異なる場合には。はっきり言えば、北アフリカや中東のムスリムたちは、多くのヨーロッパ人には不気味な存在なのだ。

ドイツやスウェーデンの都市で、“アラブ人のような風貌の若者たち”によって起こされたとされる性的襲撃が、民衆の反発に火をつけた。しかし人種差別グループの政治的利益に資するような、ヒステリックな過度の反応は、危険をもたらす。溺死したシリアの小さな少年が大人になって性的暴行者になるという、フランスの雑誌の漫画などは、軽蔑すべき無責

任な扇情である。

避難民に“テロ同調者”の汚名を着せるのもそうだ。昨 11 月 13 日のパリのジハーディスト・テロ襲撃事件に続いて、反ムスリムのヘイト襲撃が、イギリスやフランスで劇的に増えたと報じられた。パリのテロリストは、ヨーロッパに流れ込んだシリアの難民の中に紛れ込んでいたのかもしれない。しかし間違いなく、本来の焦点は、そもそもなぜ、どのようにして、こういうジハーディストがシリアへ赴いたのかということに置かれるべきである。なぜ、何百万もの人々が、あの国を追い出されたのか？

また、今週のガーディアン紙によれば、イギリスの保護施設希望者が、食料配給を受ける資格として明るい色の腕輪をするよう命じられた。この目立つ特徴のために、道路上での彼らに対する暴行が増えたという。

公式に、また非公式に、ヨーロッパは差別主義的な外国嫌いの砦になりつつある。戦争、追い出し、ファシズム、民族抹殺的迫害という、この大陸の歴史を考えてみれば、再び彼らが、このような虚無的精神の坂道を滑り落ちつつあるのは、深く憂慮すべきことである。避難民に対して強硬路線を主張する者たちが、「ヨーロッパの血統と文化を守れ」と言っているのを聞くと、ますますこの心配は大きくなる。ヨーロッパの何千年の移民を考えるならば、どんな“純粋な血統”があるというのか——悪意ある神話的空想のほかには？

ヨーロッパを、避難民を積みすぎた沈みかかったボートに例えるのも、馬鹿げていて無責任である。ヨーロッパの昨年受け入れた避難民の 100 万という数字は、総計 5 億の人口の 0.2 パーセントにしかない。デンマークが昨年受け入れた 2 万 1300 人の保護施設希望者は、その国家人口の 0.4% 以下である。

ヨーロッパの避難民“危機”は、事実の裏づけのない、反理性的な、外国人嫌いのパニックに変わりつつある。それは人々を、迫害や人種差別、そして究極的に、我々すべての市民権を無視するファシスト社会へと追いやりつつある。

しかしもっと重要なことは、亡命者をめぐり間違っただけのヒステリーは、本来の問題から目をそらすものだということである。本来の問題とは、ヨーロッパ諸国は、不法な侵略戦争とひそかな政権転覆の介入に、共謀しているということである。イギリスのデイヴィッド・キャメロン、フランスのフランソワ・オランド、それに彼の前のニコラ・サルコジのような政治指導者は、平和に対する犯罪によって国際裁判所に告訴されるべきである。自分たちのならず者政府の責任を追及しないヨーロッパ市民こそ、真の問題である。

悪漢どもを暴き立てよ、犠牲者に罪を着せるな！ もし我々が無法の暴政に向かって立ち上がらなければ、そのとき我々が次の犠牲者になる。

(フィニアン・カニンガム (1963 生まれ) は国際問題について広く執筆し、論文は数か国語で出版されている。北アイルランド、ベルファスト出身、農業化学を専攻して、英国ケンブリッジの王立化学協会の科学編集者をつとめた後、新聞ジャーナリズムの仕事に献身している。20 年間以上にわたり、彼は、**The Mirror, Irish Times, Independent** をはじめ、主要なニュース・メディアの編集者や記者をしている。現在、フリーランサーとして東アフリカに拠点をもち、彼のコラム記事は **RT, Sputnik, Strategic Culture Foundation**, それに **Press TV** に出ている。)